

教室を訪ねると多様な指導法を目にします。英語の授業もまた然り。音読を重視したスタイルやコミュニカティブ・ランゲージ・ティーチング(CLT)に加え、タスクベースト・ランゲージ・ティーチング(TBLT)、内容言語統合型学習([CLIL](#))、反復学習指導法(ラウンドシステム)も広まっています。近年は、個別最適化学習などへのAIの利活用も進んでいます。

どの指導法にも強みと課題があり、最適解は「どれを選択するか」ではなく、「どう組み合わせるか」という発想の中にありそうです。

弱点を補い、強みを活かす“組み合わせ”を探り当てるには、普段の授業で用いているやり方以外も常に学び、整理しておくべきかと。

生徒も個々に“学習者としての特性”を備えていますので、どんな授業デザインを採ろうと、“合わない生徒”への配慮とケアは不可欠。どんな選択肢を用意すべきか、計画段階からしっかり考えましょう。

より良い授業を目指す継続的改善には“評価結果に基づく指導の効果測定”も不可欠。評価の機会と基準の整備にも力は抜けません。

音読重視の指導法

正確な発音や自然なリズムが身につくのに加え、音に慣れることでの聞き取り能力の向上、文章の構造や意味を深く理解することで読解力の向上が期待される。その一方で...

• デメリット(課題)

- 繰り返し音読は、飽きやすく、モチベーションの低下
- 音読への過度な偏重は、実際の言語運用の場面が求めるコミュニケーション能力の育成を疎かにしがち

• 対策



アルクの特集記事2021年11月？

- 音読のバリエーションで効果を重ね、飽きさせない！
- 多様な言語活動を組み合わせて、学びを広げる
例) しっかり音読、問いを立てて理解の深化 (詳細は後掲)

“向かない”のにも理由は様々

音読重視
の指導法

- **学習者の特性を考慮せずに苦手を押し付けない**
 - 押し付けは学びを遠ざけさせる（主体的な学びに逆行）
- **苦手にも原因は様々** スクリーニングのやり方[別紙①]
 - 心理的要因（不安・恥ずかしさ）
 - 積極的に学ぶ姿勢（記事まとめ） [当オフィス公式ブログ]
 - 音韻認識や文字認識に抱える課題
 - ワーキングメモリの負荷超過や発達上の障がいの可能性も
- **“読まなくてもいい”という選択肢があっても良い**
 - 総合的な英語力が向上すれば良いという“割り切り”を
 - ただし、「苦手の押し付け」と「苦手に向き合う機会の提供」は異なる：避けてばかりでは自己効力感が低下することも

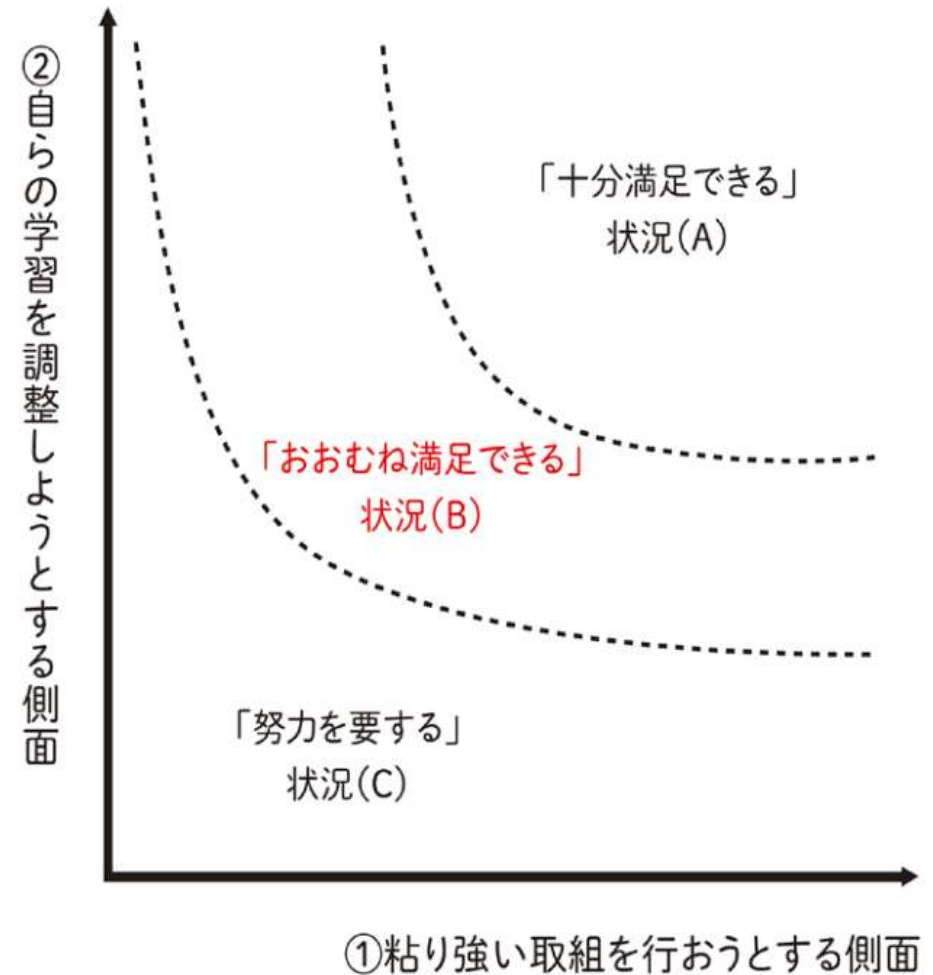
評価の基準と方法(例)

音読重視
の指導法

- **知識・技能:** 評価の頻度は「生徒が進捗を実感できるだけの練習量を積むたび」くらい？
 - 発音やイントネーションなどを先生方がチェック
 - ルーブリックで、恣意的な評価にしない(＝納得性を担保)
 - AIによる発音スコアリングなどのテクノロジーも上手に併用
- **思考・判断・表現:**
 - 音読した内容を要約し、自分の意見を述べる能力など
 - 音読後の短いスピーチで、理解度や表現力を確認
 - 測定できるのは思考力の「一部」→相応のタスクを併用して
- **主体的な学習態度:** 真面目にタスクをこなしても“主体的”とは限らない
 - 音読という活動にも“進捗と課題を捉えた学び”を！
 - 「より良い音読やスピーチ」を目指した工夫と努力の継続性

参考：主体的に学習に取り組む態度

- 課題に取り組ませ、その成果と過程を振り返る中で向上を図り、評価する
 - 自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかという意思的な側面に焦点
 - 必ずしも、学習の調整が適切に行われることは求めない(不足は指導で支援)
- 学習方策＋目的意識は、主体的な学びの最小要件



評価結果の可視化とフィードバックを経て次の学びに進むことの繰り返しのうちにしか、「進捗と改善点を捉えた学び」(学習の改善)は実現し得ない。

音読重視の指導にTBLT要素を追加

音読が持つ様々な効用に加えて、“問いを立てる”ことでの“本文の深い理解”（＋理解度の確認）

- **タスクの明確化は、達成感を得やすくする**
 - 問いを立てるという明確なゴールが学びを方向付ける
 - 達成の認識が容易になり、モチベーションに繋がる
- **アウトプットの可視化＝評価材料の拡充**
 - 評価が的確に行えないと、学習の改善は図れない
cf. [生徒は「振り返り」を効果的に行えているか](#)
 - 音読評価における「正確さ」「流暢さ」などに加えて、“問いの良否”も観点に加え、多角的に学びを評価
cf. [進歩を止めさせない自己評価の在り方](#)

Communicative Language Teaching

- **オールイングリッシュと関連するがイコールではない**
 - CLTでの教師の役割は「学習のファシリテーター」、オールイングリッシュ授業では、「英語環境の提供者」
 - CLTの目的との相性の良さ故、オールイングリッシュが推奨されることが多い～両者の違いは「目的と手段」
- **英語を使うタスクの配列で“英語を使う力”の向上**
 - ロールプレイ(実際の場面を想定した会話練習)
 - 情報ギャップ・アクティビティ(ストーリー再構成ゲーム)
 - フォーコーナースズ(Four Corners)、ジグソー(Jigsaw)
 - ディスカッション、ディベート(身近な話題で“自分事”)
 - プロジェクト型学習(プレゼンやポスター制作の協働)

デメリットと対策(最初の3つ) CLT

- **文法の理解が不足する**
 - 伝わることの重視で、文法や発音のミスが増えがち
 - フォーカス・オン・フォーム～練習後に形式の振り返り
 - cf. 単元で学んだことの体系化に挑ませる
- **自信のある生徒は話すが、消極的な生徒は黙る**
 - 話さないと進まないタスク＋役割付与(競争より協力)
 - 良好な関係が活動の土台⇔活動の中で良好な関係を構築
- **間違いを恐れて話せない生徒が多い**
 - 「間違えるのは、チャレンジしている証拠」を刷り込む
 - 先生もわざとミスをして、生徒に指摘させる
 - 進捗を可視化して、“失敗による成長”を実感させる

デメリットと対策(加えて2つ) CLT

- **英語のままでは理解できない→学習が停滞**
 - 対処のために“日本語で説明”では、下方スパイラル
 - レベル別の英語使用ルール(初心者と中級者以上など)
 - 学習場面のレイヤー(導入、説明、活動、振り返り)でも
 - 重視すべき「英語での活動」のために戦略的に日本語使用
 - 生徒間で支え合える環境(＋関係)を作ってケア
 - 協働でタスクに取り組む体験が関係を作る【再】※方向性に注意
- **入試とのギャップ(?)～入試以外にもターゲット**
 - 海外研修での現地校との交流、イングリッシュキャンプなど、従来と比べものにならない豊富な目標設定機会
 - もはや、入試得点力を“撒き餌”に意欲を引く時代ではない

CLT

- 複数の短い記事を読み、共通点・相違点をまとめる
- グラフを見て、自分の意見を添えて英語で説明する
- 聞いた内容に対する自分の意見を簡単に述べる
- スピーキングテストもタスク型へ（音読テストにしない）
 - ・ ルーブリックの標準化、録音・録画の利用、AIで音声分析
- **考査が変わらないと学びの方向付けは従来のまま**

Task-Based Language Teaching

- **“英語を学ぶ”のではなく、“英語で何かをする”**
 - 実生活で直面する可能性のあるタスクで授業を構成
 - タスクの遂行を通じて言葉を使い、運用能力を高める
 - 必要な文法や語彙も文脈の中で学習(まとめは必要)
 - 課題の選定次第で、生徒が学びを自分事にしやすい
 - 取り組むことへの“自分の理由”は、学習意欲の原資
- **授業者の役割は、タスクの設計と生徒への支援**
 - タスクは、“文法や語彙の形式的な練習”ではなく、“意味の伝達”に主眼をおいてデザイン
 - タスクに具体的で検証可能なゴールが設定されているか？
 - 生徒間の情報の不一致が、コミュニケーションを促進

TBLT導入の課題と対処①

TBLT

- **授業時間の不足(時間的制約)**
 - タスクの遂行には十分な時間が必要であり、通常の授業時間内でこれらを完了するのは難しい
 - ある程度の定型性で予測性の向上→動き出しの円滑化
 - 反転学習の要素の取り込み(語彙や表現は事前に自習)
 - 評価や振り返りにも十分な時間を確保したい！
- **学習者の準備、レディネス確保(学力差への対応)**
 - 学習者のレベルに合わせてタスクの複雑さを調整
 - ヒントの付与より、“問いの分割” cf. [小さな問いで学びを点検](#)
 - 生徒の状況を広めに想定して“プランB”も常に用意
 - 必要知識や関連情報へのアクセスを確保(配信等)

TBLT導入の課題と対処②

TBLT

- **評価の難しさ(“従来とは違う”というだけかも)**
 - タスクの完了度(目的達成度)を直接評価
 - 「観光客に道案内をする」なら、無事に到着できたかで評価
 - タスク遂行中の言語使用の質を評価
 - タスク中の発話を録音し、文法ミスの頻度や語彙の多様性などを評価(ペアやグループでの相互評価も活用)、など
 - 評価者スキルの向上訓練、相互フィードバック文化の醸成
- **教師の負担増加、教材開発の必要性**
 - 教科書会社提案のタスク活動も十分に生かしたい
 - オリジナルを創り出すより、既存のものを上手にアレンジ
 - 先生方のネットワークでアイデアのシェアと共同開発

タスクの種類と遂行中の支援

TBLT

• タスクの種類と目的

- Jigsaw (情報統合)
 - 異なる情報を持ち、それを交換・統合して課題を解決するタスク
 - 情報整理能力や協力して目標を達成する力の育成。発話の増加
- Opinion-gap (意見調整)
 - あるテーマについて賛成・反対を議論し、クラスの意見をまとめる
 - 論理的説力、意見調整スキル
- Problem-solving (問題解決)
 - 課題を解決するために、情報を収集・分析し、解決策を考える
 - 英語の運用力＋創造的解決力

• 遂行支援に足場を提供

- 言語の枠組み (Linguistic scaffolding)
 - 使えそうな表現リストの事前付与
 - 会話のフレーム (テンプレート) を提供
- 手がかりの提供 (Cognitive scaffolding)
 - 段階的にヒントを提示、“問いの分割”でスモールステップ化
- 対話による支援 (Interactive scaffolding)
 - 学習者同士のディスカッションを促すフィードバックを行う

振り返りへの取り組みませ方が鍵 TBLT

- **TBLTは「経験学習サイクル」と一致する**
 - 学習者が経験から学ぶ「振り返り」との相性が良い
 - タスクの遂行→結果の確認→改善点の発見→再実践
 - 今回の振り返りを活かし、次のタスクで〇〇にトライ！
- **振り返りも単調にしない～場面によって組み合わせ**
 - ジャーナル記録 (Reflection Journal)
 - 進捗と改善課題を捉え、次に向けた意思表示まで踏み込む
 - ピアフィードバック (Peer Feedback)
 - クラスメイト同士でフィードバックを交換
 - チェックリスト評価 (Self-assessment Checklist)
 - 自分がタスクのどの部分を達成できたかを自己評価

内容言語統合型学習(CLIL)

- **言語と内容の両方を伸ばす**
 - 言語と内容のバランスを考えた設計
 - 「言語面での支援」(語彙や表現、構文など)を意図的に組み込みながら、教科の内容理解を図る
 - 外国語と教科内容の両方に通じた教師
 - イマージョンやEMIとは設計思想が異なる
 - イマージョンは、バイリンガル育成を目指したもの
 - EMIは、大学・大学院での専門教育(言語習得は副次的)
- **精神年齢に見合った内容を選んで効果を底上げ**
 - 小学校は体験型(理科、図工)、中学は関心のあるテーマ、高校は社会的な問題や 이슈が効果的！

教師の専門性のバランス

CLIL

- **“教えよう”と考えるからこそ陥るジレンマ**
 - 英語教員が教科内容に不安を感じる
または、教科教員が英語指導に不安を感じる
- **教える人から、ファシリテーターに役割をチェンジ**
 - 本来のCLILは、教科の「知識伝達」ではなく、学習者が言語を使って内容を探究するプロセスに価値を置く
 - 適切な資料(教材:テキスト、データ)を用意したら、それについて考えるための“問い”を投げ掛ける
 - その後は、生徒間の対話で、知識や理解、気づきのシェアが進み、教科内容の理解が進む
 - その中で次の問いを見つけて、学びは深まっていく

教えるという発想を離れて

CLIL

- “問いの設計”と“気づきを引き出す支援”
 - 適切な材料と、それについて考える問いを用意
 - CLILの本質は“探究ベースの学び”
- ファシリテーターとしての仕事
 - 思考を促す読み物・グラフ・映像などを選ぶ
 - 単なる事実確認で終わらない“仕掛け”を問いで作る
 - 活動を通し、問題発見力を発揮（鍛錬）する意識を持たせる
 - 考えを伝えるための語彙・表現・構文をサポートする
 - 学びの進め方や、問いの質の向上を意識させる
- CLIL実践の壁は専門知識ではなく、授業デザイン

新しく探すより教科書
を利用。「重ね塗り」も
効きやすく、効果的

導入への障壁(ほか)

CLIL

- **学習者の言語力にばらつきがある**
 - 英語がわからないと内容も分からず、モチベーションを維持する材料を完全に失う(やる気を削ぐ)
 - その場で使える“支援の道具”(語彙リスト、デジタル教材、周囲との相談・話し合い、必要ならAI)を揃える
- **既製の教材が少なく、教師の準備負担が大きい**
 - 材料そのものの好適性よりも、切り口を決める問いのありようの方が、授業の流れを大きく左右
- **観点があいまいだと評価が難しくなる**
 - 内容の理解はクイズなど、言語活用や協働場面での活動評価はルーブリックで



AIが考えた授業案

◆ 評価ルーブリック（CLIL授業 “Plastic Waste and Our Future” 専用）

以下は、言語活用・認知的深まり・協働・文化的視点を中心に構成したルーブリックです。

各観点4段階評価（3～0点）で、生徒にも事前に共有できる設計としています。

評価観点	3点（優れている）	2点（おおむね良い）	1点（努力は見られる）	0点（十分でない）
言語活用 （英語による 発表・意見交 換）	伝えたいことが明確で、適切な語彙・構文を効果的に使っている。発音も聞き取りやすい。	内容は伝わり、語彙や構文も適切だが一部あいまいな表現がある。	単語やフレーズ中心で、伝わりにくい場面がある。構文や語順の誤りが目立つ。	意図がほとんど伝わらない、あるいは発言がほとんどない。
認知的深まり （情報分析・ 理由づけ・提案 の論理性）	資料に基づく根拠が明確で、他との比較や因果関係を論理的に説明できている。	資料の活用や理由づけがなされているが、一部論理の飛躍がある。	自分の意見はあるが、理由が曖昧または資料との関連が弱い。	意見や理由が不明確で、分析的思考が見られない。
協働・文化的 視点 （対話や異文 化理解を活か した学び合い）	他者の意見をよく聞き、問いかけ・応答があり、異なる視点への理解も示している。	他者の意見に反応し、自分の考えに活かそうとする姿勢がある。	発言はあるが、他者とのやりとりが少なく一方向的。	他者の意見にほとんど関わらず、自分の視点に閉じている。

※提出物（スライド・ポスター）についても上記観点到照して評価できます。

反復学習指導法(ラウンドシステム)

同じ教材を複数回、異なる観点から学び直す教授法
スパイラル・ラーニングによる内在化と多面的理解

以下、https://www.manabinoba.com/class_reports/021968.html より引用・抜粋

- **教科書の表現が生きた知識として定着しやすい**
 - 従来のやり方だと年度末にはユニット1の内容を忘れている
- **ストーリーと結びついた表現が染み込む**
 - 場面が表現を想起させる＋場面に応じた表現を自分で選択
- **ラウンドごとに求められるハードルが低い**
 - 達成感を積み上げながら、最終ラウンドに到達できる
 - 苦手意識のある生徒にとっても取り組みやすい
- **ラウンドごとの目的を明確に、振り返りを重ねる**
 - 振り返りはラウンド途中でも～形成的評価で学習改善



マッチしない生徒

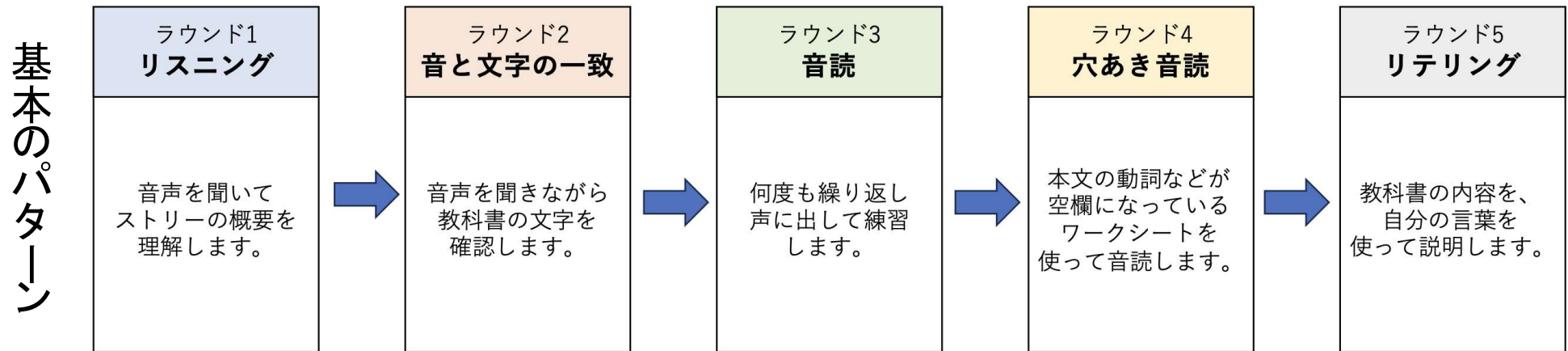
ラウンド
システム

- **なぜ同じ教材を繰り返すのか、意味づけできない**
 - 各ラウンドの「ねらい」と「前回との違い」を毎回明示
加えて、“自分の目標”を書かせる（＋フィードバック）
- **繰り返しを単調と感じる、飽きっぽい生徒**
 - “活動の多様性”で、生徒の関心や集中を高める
 - 生徒の安心と定着を支える“活動の定型性”は維持
 - 「やり方は違うけど進め方は同じ」「活動が変わっても、ラウンドごとの目的をぶらさない」「活動を過程で終わらせない」
- **表現活動に強い抵抗がある生徒（Round3/5）**
 - 音読はペアや録音提出から始める
 - Round 5は「選択式タスク（書くor話す）」など段階的に

ラウンドの設定にも柔軟性

ラウンド
システム

・ラウンド数や各ラウンドの目的を柔軟に設定する



－ 3ラウンド・システム：効率的な学習サイクル[例]

第1ラウンド 教材の音声を聴き、大まかな内容を理解。ピクチャーシートで、ストーリーの場면을視覚的に確認。簡単な質問で内容理解を深める。

第2ラウンド 音声を聴きながらテキストを読み、音と文字の一致を確認。重要な語彙や表現を学び、文法的な構造や文章の組み立てを分析。

第3ラウンド 教材内容を要約、自分の意見や感想を述べる。ペアやグループでディスカッションで、学んだ表現を実践的に使う。関連するトピックで短いプレゼンやスピーチ。「**問いを立てて答えを作る活動**」も(前掲)

他のアプローチと組み合わせ

ラウンド
システム

- **“言語使用”を中心とした課題解決型学習 TBLT**
 - Round 5にアウトプット課題（作文・スピーチ・プレゼン）
 - Round 2～4で必要言語を習得、Round 5で“タスク達成”
- **教科の内容と言語を同時に学ぶ CLIL**
 - 教材に“教科的要素（SDGs、理科・社会・倫理）”
 - Round 1～3で内容理解→Round 4～5で発信に展開可能
 - 「内容に立脚した言語活動」という設計ならCLILと好相性
- **意味あるコミュニケーションを通じた学習 CLT**
 - ペア活動・協働読解・対話的表現を組み込むのも容易

ラウンドシステムは教材の扱い方・授業構成の“枠組み”であるため、学習活動の「目的」や「コンテンツの選び方」には柔軟に対応できる。

アプローチ選択にも視点は様々

選択の基準は「どこにプライオリティを置くか」

• 学習者の英語習得段階

- 初級～中級：
音読重視、ラウンドシステム
- 中級～上級： TBLT、CLT、CLIL

• 授業の目的とゴール

- 語彙・文法・発音の習得：
音読重視、ラウンドシステム
- コミュニケーション力の育成：
TBLT、CLT
- 他教科との統合的な学習（思考力・教科内容も同時に）：CLIL

• 授業時間数・学習期間

- 少ない授業数で比較的短期間：
音読重視、ラウンドシステム

- 中長期で言語運用力を育てたい：
TBLT、CLT、CLIL

• 教員の指導経験とリソース

- 英語指導の経験が浅く、
指導スクリプトがあると安心：
ラウンドシステム
- タスクやプロジェクトの設計ができる：
TBLT、CLIL
- 柔軟な授業運営が可能： CLT

• 学習者の学習観や文化的背景

- 「型」や明確な答えを求めがち：
音読重視、ラウンドシステム
- 自律性に富み、創造的活動にも慣れている： CLT、TBLT、CLIL

ブレンディッド・ラーニング(ICT活用)

- **デジタル教材＋対面授業で”個別最適化”を図る**
 - － デジタル教材、AI活用、オンライン学習の導入
 - － すべての指導法と組み合わせ可能な、汎用ツール
 - － ラウンドシステムとは特に“好相性”(復習・反復)
- **活用シーンはいろいろ**
 - － フリップド・ラーニング(反転学習:授業前に基本学習)
 - － アダプティブ・ラーニング(AIを活用した学習アプリ)
 - － オンライン英会話やAIチャットボットの活用
 - － ゲーミフィケーションを取り入れた学習
 - － ハイブリッド型プロジェクト学習

別紙④英語授業での
ブレンディッド学習



考查問題は学びを変える第一歩

- **生徒はテストに合わせて勉強する**
 - 授業改善をしても、考查が旧態依然なら、生徒は従来の“テスト対策”に引き戻される
- **力を入れて指導しているところには高い解像度で**
 - わずかな伸びもきちんと捉えることで
 - 生徒にとっては、進捗と改善課題を捉えた学びの実現
 - 先生方には、取り組みに対する理解と共感を得る材料
- **考查の得点の進路実現や検定合格の可能性**
 - 両者が高相関なら、安心して授業に向かえる
 - 考查問題の妥当性を評価し、最適化を図る
 - 定期考查の出題計画作りで、指導目標の確認と目線合わせ

要素ごとに学力を可視化：集計の工夫

- **総合点では、伸びや学力の不足が捉えきれない**
 - 検定や共通テストのスコアとの相関をとるにも、ズレを覚知するために、“領域ごとの小計”の算出が有用
 - 学習内容をそのまま問う問題、初見の文脈や条件を用いた問題を分けるだけでも、個々の生徒の学びの特性が見える
- **学習内容と学力要素でマトリクス集計表**
 - 各単元で学ばせた言語形式などと、それらを駆使した言語活動における思考力などを、縦軸・横軸に配列
 - マトリクスの縦横で小計を採ると、学力が立体的に捉えられ、生徒にとっても学びの課題を見つけやすい。

cf. [考査問題における得点集計（集計の取り方と活用法）](#)